

誕生日ケーキのろうそく

(原文は英語)

ミラ (18 歳)

ベラルーシ

私は死ぬ準備ができていませんでした。平和のためには、命を犠牲にする人々が必要だという人がいます。「私は違う。15 歳の私一人では何も変えられない。踏み付けられ、忘れ去られるだけだろう」と、故郷のミンスクの路上で抗議活動を行う人々とすれ違う車の中で、震えながら思いました。2020 年、不正選挙と何千もの命が失われたのを目の当たりにして、バラ色の眼鏡をかけた子どもっぽい私の理想主義は心の内側に閉ざされました。その時、私は、平和ではないという血の流れるような現実を初めて経験しました。私は、現象としての暴力についてはよく分かりませんでしたが、もう他の人の暴力を否定するのを止めました。政権に口をふさがれ、胸が張り裂けそうになりながら、また相変わらず自分が無価値であると感じながらも、断固として不正に屈しないという意志で、私は闘いを始めました。

私にできることは何だったのでしょうか。それは、私の視点や志を共有できる仲間を見つけることでした。世界のゲームにおけるステークホルダーとしての「世界の若者たち」という曖昧な立場は、その本当の答えに出会うと、消えてなくなります。ジョージアの首都トビリシで行われた、3 つの国とのオンラインによる「ヨーロッパ奨学金プログラム」でのボランティア活動は、私にとって「国際的な若者」の一員になるための道筋となりました。そのプログラムでは、大切なことは何か、生活を向上させるという共通の目標にどのように貢献できるかを学びました。自分と似たような考えを持つ人々に囲まれ、意識やチームワーク、誠実さ、献身、他者を助けたいという思いやりや希望が持つ力の価値について学びました。

私たちは皆、行動を通してコミュニティを改善しようと努めているものの、現在の秩序は荒廃してしまっています。様々な地域出身の友人たちを抱きしめ、彼女たちの心をしっかりと受け入れ、温めていると、私の体が彼らや彼女たちの痛みに共鳴しているのを感じます。私も含めて一部の人々は、家に帰れず、受け入れもされず、無力で不安な状態に置かれています。立場の弱い小さな社会集団に属していても、多数派集団に属していても、私たちに人権は一度も与えられたことがありません。国内外での軍事衝突による荒廃に直面しています。こういったことの全てが、私たちの中に癒えることのないモヤモヤした傷を作りました。しかし同時に、私たちはお互いに歩み寄り前進するよう促されています。平和な世界に生きるための権利と機会を奪われながらも、私たちはそれを創造しようと試み続けているのです。

私は学校で、「平和」を、その定義の一つ、「戦争がないこと」という複雑な表現で言語化することを学びました。「absence of war（戦争がないこと）」という、たった3語に世界中の人々が同意し、さらなる議論を続けるために、平和の概念とはどれほど洗練されている必要があるのでしょうか。それでも私は、その複雑さ故に、私たちの社会の中で人類が扱えないものは何もないと信じています。とはいえ、特権や権力を持つ人々が、自分たちが人類の運命を変えられると決めた途端に全ては行き詰まってしまいます。私は様々な性質を持つ国際紛争や地域紛争を数多く研究してきましたが、世界がより平和になることを妨げている最も厄介な原因は権力のダイナミクスであると考えています。

理想主義的かもしれませんが、人々の個々の選択が他者の自由を制限しない状態を創造することが、私たちにできる最善の策である、と心の底から信じています。誰もが、人権と機会に満たされた人生を送る資格を持っています。これを完全に達成するのは不可能であると分かっていますが、私はまだ18歳で、このまま人間らしく生き続けたいと思っていますし、他の人にもそうあってほしいと願っています。だから、私たちはその解決策を見つけられると信じています。人間による行動の一つ一つ、あるいは行動しないことの一つ一つは、個人の考え方や価値観から始まります。仲間同士の学び合い、若者同士の意見やアイデア、経験の交換を通して、誰もが公正に成長・向上していく世界規模のコミュニティに近づくことができます。NGOや市民社会の他の組織の活動に若者たちを巻き込むことに焦点を当て、彼ら彼女たちがお互いに協力し合い、地域レベル・国際レベルで若者のアイデアや意見を表明できるよう、政府（欧州若者フォーラムなど）と共に、会議の場やプラットフォーム（模擬国連など）を作ること、行動を起こすために私たちにさらなる力を与えること—これらは、世界を平和へと導くために必要な土台となります。

誕生日ケーキのろうそくの火を吹き消す時、私はいつも「世界の平和」を願ってきました。静かに、願いごとを心の中で何度も唱えるのです。そうしないと、願いは叶いません。以前は平和を「願って」いました。正しいことはそれしかないと考えていました。しかし、私はもう願うことはしません。私は「信じて」います。何故なら、私は、何千、何百万もの人々が平和に向けて協力し合っていることを知っているからです。絶対的な平和を完全に実現するのは不可能です。しかし、私は絶対的な平和にもっと近づいた実感を得たいと願っています。そして私たちなら、それができると思います。